様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６８１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２８０４

研究課題名（和文）Society 5.0に向けて学校運営で朝鑑賞に取り組む効果測定とシステム開発

研究課題名（英文）Effectiveness measurement and system development for school-run morning viewing activities towards Society 5.0

研究代表者
三澤　一実（MIsawa, Kazumi）

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：１０３４８１９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：全国の小中学校で始業前に行われている朝読書などの時間で、美術作品などを鑑賞する取り組み『朝鑑賞』を行う事で、学力向上や自己肯定感の向上が確認できた。また教師の指導力の向上も認められ、主体的対話的で深い学びを進める基礎能力の獲得につながっていった。本研究では全国の学校で朝鑑賞の取り組みができるようにWEB上に大学生の作品を掲載し誰でもアクセスできるようにすると共に、全国各地の小中学校等で朝鑑賞の導入に向けてのレクチャーを行い、長野県東御市では市内全小中学校での取り組みが始まった。朝鑑賞は生徒及び教師のWell Beingを実現させる取り組みとなることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
週に１回、始業前の１０分程度、生徒と教師が美術作品から感じたことを言い合う対話を通して､生徒の学力の向上が確認できた（全国学力調査等）。また、自己肯定感の高まりや、それに伴うメタ認知の向上が認められた。不登校傾向の生徒の改善や、緘黙の児童が手を上げるなどの出来事も起きた。一方,調査校の4校中１校で変化が認められなかった。我々の観察では教師の朝鑑賞に対する理解が不足している点が確認できた。
社会的な意義としては、学校教育で不足している非認知能力の獲得,批判的思考やコミュニケーション能力などの21世紀型学力の獲得に有効であり､どこの学校でも導入できるシステム構築を提案できる研究となった。

研究成果の概要（英文）：It has been confirmed that the ``Morning Appreciation'' initiative, which is held at elementary and junior high schools across the country and involves viewing works of art during morning reading time, leads to improvements in academic ability and self-esteem. Teachers' teaching abilities have also improved, and they have acquired the basic skills to promote independent, interactive, and deep learning. In this study, we made university students' works available for anyone to access online so that morning viewing could be implemented in schools across the country, and we also held a lecture to introduce morning viewing to elementary and junior high schools nationwide. In Tomi City, Nagano Prefecture, efforts have begun at all elementary and junior high schools in the city. It became clear that the morning viewing was an initiative for students and teachers to realize their own happiness.

研究分野：美術教育

キーワード：鑑賞教育　対話　朝鑑賞　学校経営　コミュニケーション能力　不登校　自己肯定感

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１． 研究開始当初の背景

(1) 平成 28 年に学習指導要領が改訂となり、主体的対話的で深い学び（アクティブラーニング）が学び方の方法として示された。先行研究で朝鑑賞は教師の対話力を向上させファシリテーション能力の獲得を実現させることが明らかになっている。本研究課題の「Society5.0 に向けて学校運営で取り組む朝鑑賞のシステム構築」はそのような教師の対話力の育成に必要な活動となる。GIGA スクール構想の実現下ではタブレットなどの ICT 器機を使った鑑賞プログラムの構築も急がれている。学校教育のデジタル化の導入、新たな教育課程の実現という時代の要請に基づき、本プロジェクトの効果測定とシステム作りと効果測定が重要であると考えた。

(2) 本研究の朝鑑賞の取り組みについては２０１６年より所沢市立三ヶ島中学校と坂戸市立桜中学校で先行研究を開始した。その中で学力の向上や自己肯定感の増加が確認された①。しかし調査校が２校であり、学力向上に効果がある点を立証する上で客観的なデータとは言えない状況であった。客観的なデータを収集するためには複数校での実践と検証が求められていた。

(3) 朝鑑賞を行う上での効果的な鑑賞作品の傾向を調べる必要も生じた。特に実践校ではどのような作品が鑑賞をする上で効果的かを教えて欲しいとの要望が多く、子どもの発言の引き出しやすさ、また関心を持つ作品傾向などを調べることが朝鑑賞の普及や活動の充実度に大きく影響を与える。その様な調査も未だ十分であり傾向を示した事例がほぼない状態である。

２．研究の目的

(1) 朝鑑賞のシステム開発 - デジタル化への対応
朝鑑賞を広げ、一般化できる取り組みとするには、鑑賞活動における鑑賞教材のデジタル化が必要である。今までは実物の絵画作品の貸し出しで鑑賞を行っていたが､輸送にかかるコストなどの経済的､物理的な条件が朝鑑賞を広げる障害となっていた。その障害を取り払うための方法として、鑑賞教材のデジタル化に取り組んでいく。また、朝鑑賞の普及を考えると全国各地の学校で取り組める汎用的なプログラムが必要である｡鑑賞作品の確保についてのシステムや､各学校を巡回する鑑賞作品のローテーション、成果の共有システムなどの構築も必要となる。成果共有に関してはタブレットで入力でき、また活用できるデータベースの作成も必要だ。さらには地域によっては持続可能な活動を目指した美術館などの地域連携開発（青森県八戸市 , 長野県諏訪市)、地元の大学や作家、教育委員会との協働により運営するシステム構築などのモデルづくりに関する提案も取り組む必要があろう。朝鑑賞のデジタル化を進める上での課題や効果を明らかにし，実践しやすいシステムの構築を図っていく。

(2) 鑑賞作品の検討
朝鑑賞の成果を測るためには提供する作品の質に関した比較にも取り組みたい。また、鑑賞を深めるために個々の作品が持つ造形的な言葉（造形的な視点）の研究も必要である。作品を注意深く見ようとする造形的な視点の獲得が、科学的な観察や思考を後押しし、身の回りの状況に対しても注意深く観察するする力につながると考えている。その際、朝鑑賞をデジタル画像で見せた場合と実物で見せた場合との効果測定や検証が必要となる。このような作品提供のシステムづくりについて研究をする必要がある。

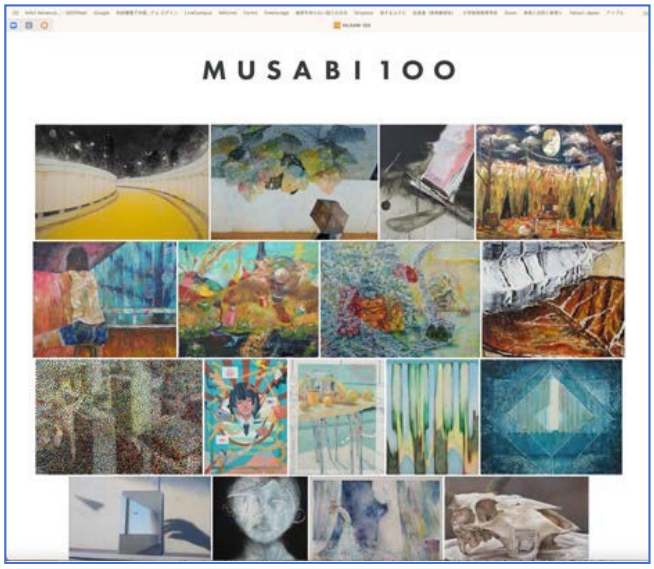
(3) 朝鑑賞を通してこれまで把握できていない効果や能力の獲得状況を把握
先行研究では教師のファシリテーション能力や、生徒の学力向上については成果が認められてきた。ここではそれらの能力以外にどの様な効果が現れるか、実践を観察しながら分析し考察していく。また、デジタル化とこれまでの実物で行う取り組みと比較して、獲得できる能力に差があるのか、また、デジタルならではの効果等は見られるのかなど、実践を通して検証していく。

３．研究の方法

本研究は朝鑑賞実践校を複数設定し、継続的な観察によるデータを蓄積し考察していく。実践校は所沢市立三ヶ島中学校、所沢向陽中学校、坂戸市立桜中学校、川口市立鳩ヶ谷小学校を設定した。それらの学校には定期的に通い実践の観察や教師などからヒヤリングを重ねていく。定期的にアンケートやルーブリック調査を依頼して、得られたデータを考察していく。朝鑑賞のシステム開発では朝鑑賞作品を集めた情報サイトを作成してその利用の仕方について考えていく。

４．研究成果

(1) 朝鑑賞のシステム開発
朝鑑賞を全国どこでも、誰でも取り組める取り組みにしていくためには物理的な制約を取り払うことが求められる。



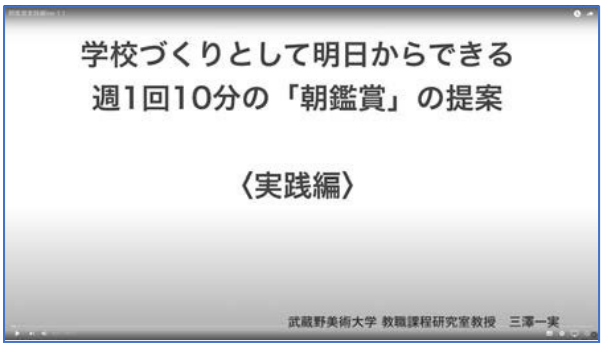
①グーグルフォトによる朝鑑賞作品のリンク
朝鑑賞に使用する鑑賞作品を実物作品からデジタル作品に変えていくことにより、全国どこからでも WEB を通して作品の使用が可能となった。研究当初はデジタルカメラで作品を撮影し、グーグルフォトに貼り付け，そちらのリンクを伝えていた。実践校ではリンク先にアクセスし、教室前面にあるモニターや生徒が持参するタブレットなどを介して作品鑑賞を行った。この方法だと、作品画像を拡大し、細部の確認ができる点にメリットがある。またリンクを張ることによって朝鑑賞に関する情報を利用校に伝えることができた。

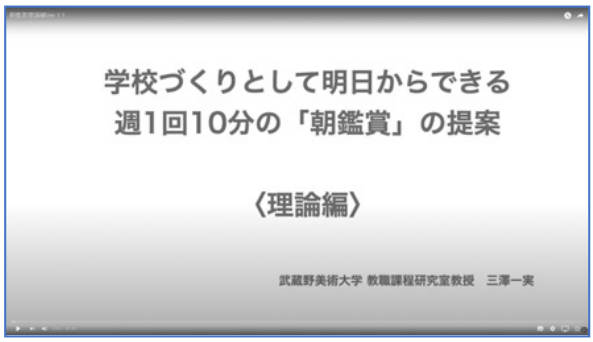
②朝鑑賞作品の WEB サイト構築
朝鑑賞の拡大に際して、もっと簡便に朝鑑賞のデジタルデータの提供を可能にしたのが専用ウェブサイトの構築である。こちらはサイト名を伝えるだけで検索が可能であり、朝鑑賞作品の利用拡大につながっていった。一方、利用者との情報交換は途切れ、その成果の収集などの共有は不可能となった。この２つの画像提供の方法は,それぞれ役割が異なるので今後も平行して使用していく。(写真上:ウエブサイトにデジタル画像の提供「MUSABI100」

(1) 実践校の拡大

①実践校の広がり
研究当初２校での実践であったが、年を経る度に実践校が増えていった。その理由は、今日的教育課題において朝鑑賞の効果が周知されていったからである。茨城県では茨城県立総合教育センターの STEAM 研修講座で行った講演が契機となり複数の実践校が生まれ、その成果が翌年の研修等で紹介された。実践を始めようとしている学校から研修依頼も受け、朝鑑賞の理解を広めていったことも大きい。長野県では芸術文化県を目指す政策のもと、県の文化振興課と長野県芸術振興財団が県内美術館の作品利用と鑑賞教育の推進を行う取り組みとしてプログラムに組み入れられて、県内 4 地区で対話鑑賞講座を開いて朝鑑賞の紹介を行った。鳥取県では朝鑑賞が不登校対策になる点に着目した県議会議員が教育員会や美術館に働きかけ、鳥取県美術館を中心に全県で取り組む動きが出てきた。一方埼玉を中心に朝鑑賞の実践を体験した教員の異動により広がりを見せた事例も出てきた。坂戸では教頭会で朝鑑賞の研修が行われ，県教育センターの研修においても紹介されるなど朝鑑賞という活動について知られていった。

② 実践成果の収集
研究開始時の実践校は２校であったが、最終年度は連絡が取り合える実践校は 17 校に拡大した。そのうち４校を抽出して継続的に観察してきた。この４校の実践では教師の資質能力の向上や，生徒の学力、自己肯定感などの向上についてデータ収集をした。主な内容は生徒アンケートや教師へのヒヤリングである。生徒アンケートでは生徒が朝鑑賞に対してどの様な印象を持っているかを調査し、肯定的な意見が約９割であった。教師ヒヤリングでは児童生徒の成長を実感的に捕らえた回答など朝鑑賞の効果に期待する意見が出ると共に、朝鑑賞について消極的な意見を持つ教師などの考えを知る事ができた。その主な意見は，管理職等からの指示でやらされ感を抱いており、また、すぐに効果が出ない点において，取り組みの意義を実感できないという意見であった。その様な教員は取り組みを始めて２年未満の教師が多い。小学校と中学校での実践を比較すると、小学校の方が比較的導入に壁がなく取り組めて成果も出やすい。日頃の授業スタイルが影響していると考えられる。一方、中学校は教科担任制で、小学校に比べ対話に慣れてない実態があり、導入に時間がかかる。





(3) 研修制度の改善

①経験格差を解消する動画作成
朝鑑賞のシステム開発においては、実践の中で浮かび上がった継続の難しさを解決する必要がある。すなわち教員の異動に伴う新規に取り組む教員のスキルアップについて，２本の動画（写真上）を作成した。これは２年以上朝鑑賞を経験した教員と始めて取り組む教員との実践力の差が，実践継続の壁になる問題である。新年度異動してきた教員にとっては初めての取り組みであり、すでに経験している教師との乖離を生んでいた。その乖離を埋めるため実践前に理論研修を行う動画を作成した。

②体験型ワークショップを導入した研修
朝鑑賞の理解を進めて行く上で重要な取り組みは演習である。理論的に理解してもファシリテーションができるとは限らない。当初は理論的な説明を行った上で演習を行ったが、後半は演習を行って、その間、受講者の頭の中で何がおきていたかを語り合う研修とし、まとめとして理論的な補足を行った。この方法が最も効果的であると考える。

(4) その他

①行政主導の取り組み
朝鑑賞を普及する上での課題は行政単位での組織的な運営である。ほとんどの実践校は各学校長の主導のもとで行われており、校長の異動とともに終わる傾向がある。長野県東御市では筆者の働きかけにより市の文化スポーツ振興課と教育委員会との協働で取り組むことになり、市内全７校で実施となった。市ではこの取り組みを未来に向けての人づくり地域づくりと捉え、教育委員会では不登校対策と捉えた。行政と教育委員会との協働により、小中の連続が可能となり市内全校での比較が可能となった。この実現は研究最終年度の取り組みとなったため、成果検証はまだ出ていないが、今後継続的な観察によってその成果が確認されていく事になるだろう。(写真右・次頁：市内全小中学校の保護者に配布した朝鑑賞のリーフレット。2024 年３月)

②美術館主導の取り組み
朝鑑賞は学校主体であるがそのシステム作りに関しては美術館との連携が可能性を開いていく。長野県では信州アーツカウンシルが主体となって朝鑑賞導入に向けて対話鑑賞の講習会を県内各所で開催した。長野県東御市も２つの美術館「梅野記念絵画館」と「丸山晩霞記念館」が絡んでいる。その２館が所有する作品をデジタル化して武蔵野美術大学の朝鑑賞作品と併用して進めている。美術館にとっては鑑賞人口を増やす取り組みとして位置づけられる。鳥取県も県立美術館が主体となって進め、八戸も市立美術館が活動の中心となっている。これらの活動については筆者が美術館等に説明をし、活動の内容を理解していただいた上で共同研究として進め、今後も継続して取り組んでいく。

参考文献
① 三澤一実 ,「『朝鑑賞』の取り組みと成果報告」,2018, 日本美術教育研究論集 No,51,pp.287-294

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 三澤一実	４．巻 vol,20
２．論文標題 Society5.0時代のデジタル朝鑑賞の取り組み	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大学造形美術教育研究	６．最初と最後の頁 58-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三澤一実	４．巻 vol.19
２．論文標題 「旅ムサWeb」-　オンラインを使った鑑賞活動	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大学造形美術教育研究vol.19	６．最初と最後の頁 60-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三澤一実	４．巻 no,104
２．論文標題 2019 年度美術科教育学会リサーチフォーラムin 所沢 報告	５．発行年 2020年
３．雑誌名 美術科教育学会通信	６．最初と最後の頁 19-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 三澤一実
２．発表標題 朝鑑賞とSTEAM教育
３．学会等名 2023 STEAM International Symposium in Amami（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 三澤一実
２．発表標題 学校での学びを豊にする朝鑑賞のとり組み
３．学会等名 埼玉県西部地区教頭会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 三澤一実
２．発表標題 STEAM教育と朝鑑賞
３．学会等名 茨城県教育センター（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	東良　雅人 (Higashira Masahito) (70619840)	国立教育政策研究所・教育課程研究センター研究開発部・教育課程調査官 (62601)	
研究分担者	米徳　信一 (Yonetoku Shinichi) (80240381)	武蔵野美術大学・造形学部・教授 (32681)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関